

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00812

研究課題名（和文）滞日外国人支援におけるメディエーション 保育者の専門性と複言語・異文化間能力

研究課題名（英文）Concept of Mediation in Supporting Foreign Residents in Japan: Professionalism and Multilingual Intercultural Competence of Child Caregivers

研究代表者

姫田 麻利子 (Himeta, Mariko)

大東文化大学・外国語学部・教授

研究者番号：50318698

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：調査票にもとづく先行研究は、保育士たちが翻訳や通訳に骨を折る一方で保育所の規範を含む自らの文化的価値観を振り返るには至らない実状に着目するが、インタビュー調査を終えて強調したいのは以下の点である。
保育士たちは規範意識より保護者との信頼関係構築を優先し、複数言語および絵や写真、身ぶりを組合せたコミュニケーションコードを日々開発している。しかし、子どもの複数言語使用に関しては、その発達ケースを知っている保育士と知らない者とは態度に差があり、後者は言語的混乱を恐れ、家庭の言語政策に介入する。多言語多文化化が可視化されている環境においても、教育に対するモノリンガルな観念は根強く残る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本で働き生活する外国人が公共サービスの恩恵を受けられる環境の整備として、多言語・多文化対応がすすめられているが、多様性を受け入れる意識・態度や行動は職業的専門性のなかでどのようにあられ、どのように発展するか。事例研究により、保育士の保護者に対する創造的複数言語使用の発展性と子どもに対するモノリンガル規範の固定化という相反的態度を記述し、養成に必要な知識項目を提案できた。言語教育の研究者と社会福祉の研究者の協働により、（少数派の主流言語能力発展とではなく）主流言語話者のケアする能力という視点にもとづいて、メディエーション（他者との距離を縮める働き）概念の多義性を主張している。

研究成果の概要（英文）：The results of several quantitative surveys show that while childcare givers are busy translating and interpreting, they tend to be unaware of their own cultural values, including the norms of the Japanese childcare center. After conducting interviews, our findings are as follows: participants value building relationships with parents, through which they create new communication codes, sometimes learn a new language, and even change their usual norms when they encounter cultural conflicts. On the other hand, attitudes towards emergent bilingual children varied among participants, depending on local contexts, the number of cases they know, or their beliefs about language acquisition. Some intervene in the family's language policy due to fears of linguistic confusion. Despite the visible multilingual context, monolingual norms of education persist.

研究分野：外国語教育

キーワード：多文化共生保育 複言語 異文化間 メディエーション 家庭言語政策 多文化家庭支援 保育者

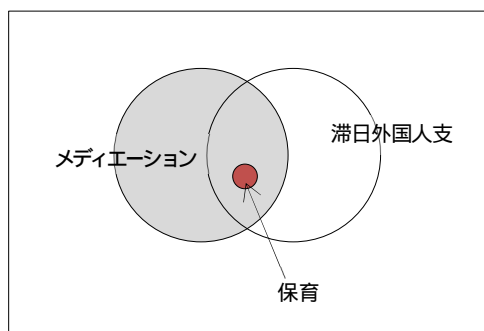
1. 研究開始当初の背景

言語教育の領域から見れば、背景には CEFR 増補版刊行をきっかけとするメディエーション概念の議論があった。日本の社会福祉分野では、多文化家庭支援における専門性の定義が課題となっていた。前者においては移動支援場面の創意的コミュニケーションの事例から、複数言語使用、異文化間意識・態度を研究する動向があった。後者においては、多文化共生保育を担う保育士の異文化間意識・態度に焦点を当てる研究は少なかった。

2. 研究の目的

言語教育の研究者と社会福祉の研究者の協働により、主流言語話者のケアする能力を対象として、他者との距離を縮める働きとしてのメディエーションの事例を研究する。

『保育所保育指針解説書』(厚生労働省 2018)によれば保育者は、日本語コミュニケーション能力が十分でなく文化や習慣が異なる保護者に対する支援と、子ども間の文化の違いを互いに尊重する心を育てる実践を担う。実際には、どのように行動し、行動を促すのはどのような意識で、その意識を培った経験はどのようなものか。支援行動の主観的振り返りにおいて、専門性、複数言語の知識、異文化間意識・態度はどのように関係するか、その発展はどのようにあられるか。こうした問題を分析する。



3. 研究の方法

(1) 欧州言語教育文脈のメディエーション概念に関する文献レビュー、欧州言語教育政策のうち就学前を対象とした文献レビュー、日本の多文化保育に関する文献レビュー。

(2) 2020年8月から11月、2022年6月から9月に、計24名の保育士を対象に、半構造化インタビューを行った。外国人集住地域、地域人口に占める外国人の割合が急増する地域、外国人の割合が低い地域のいずれかに偏らないように、調査参加者を募った。インタビュー・ガイドで取り上げたトピックは、キャリアパス、日本語や日本の習慣をよく知らない保護者とのコミュニケーション方法、日本語を話さない家庭の子どもを受け入れる際の実践、困難を克服するための創造的な戦略、養成課程で多言語・多文化ケア・支援について学んだ経験、同僚や施設長との意見交換、自治体の政策などである。インタビューはすべて書き起こし、まず具体的なコミュニケーションのエピソードに焦点を当て、次にそのエピソードに関連する行動や認識に焦点を当て、参加者の発言を比較した。

(3) 2022年9月に保育者の家庭言語政策介入に関して、外国人集住地域の保護者3名に対するインタビューを行った。

4. 研究成果

(1) 本研究は、複言語使用、異文化間意識・態度そしてメディエーションは、個人の経験とその軌跡をうつついて個人が心に描く表象の特異性や固有性をあらかず概念であるという立場から出発している。関連して、CEFR 増補版の著者 North & Picardo が参照したメディエーション定義のうち、次の2つの定義をとくに参考にした。ひとつは Zarate (2003)の言及、すなわち「メディエーションとはパートナーと関係をつくり、発見する空間のこと。新しく来た人に文化的・言語的文脈をわかりやすく教える人のこと。言語や文化的参照が排除や社会的暴力を引き起こすような場合の紛争や緊張状態におけるメディエーションは、紛争の対象を明らかにし、それが解決につながるかわからなくても何らかの取組みを導入するプロセス。修復(リメディエーション)の状況は一樣ではない。言語的・文化的な対立に代わる第三の空間に特有の動きを吹き込むメディエーション。この多元的な空間では、差異が名付けられ、交渉され、再調整される(p.99)」。もうひとつは Coste & Cavalli (2015)による定義、すなわち「メディエーションとは、所与の社会的文脈において、二つの(あ



るいは二つ以上の)他者的な極の一方に対してもう一方が緊張状態にある時に、その距離を縮小するために行われるあらゆる操作、取組み、介入(p.32)」である。

(2) 主に外国人急増地域で実施した予備調査では、保育士は、保護者と子どもの多様な社会的・文化的背景を受け入れながら、自分が日本的価値観のものさしで相手を判断していないかという内省と自己評価に至ることや、様々なコミュニケーションツールを開発しながら伝達し、相手との信頼関係を築き上げるための歩み寄っていることがわかった。しかし同時に、保育士個人の多文化体験は限られており、保護者の出身国の社会・経済・政治的状况、文化的特色、生活習慣、宗教観、家族観、子育て観等の知識が不足していることも明らかになった。

(3) 保育士養成校では、「多文化と保育」「多文化保育論」といった科目が開講されているが、科目のカリキュラム全体における位置づけや内容は各校に任されており、今日の現場で有効な知識を授けられているか確かではない。保育士の知識と経験の不足が、子どもや保護者の言語や出身文化を否定する行動につながりかねないことに注意を喚起する先行研究は複数あるが、知識と経験の不足がどのように家庭の言語文化の否定につながるのか、具体的な事例を知ることで導入すべき知識を特定できるのではないかと。

(4) 本調査では、保育士の実践のなかでもと保護者および子どもとの直接コミュニケーションのエピソードを集めた。調査票をもちいた先行研究の多くが、保育所では外国人保護者への言語的支援に注力する一方、保育所の規範を堅持する姿勢を焦点化しているが、本研究の参加者たちは規範意識や翻訳通訳の正確さよりも、保護者との信頼関係づくりを優先していた。ただし、集住地域と急増地域の差、経験による差があった。急増地域の保育士は、支給された通訳翻訳ツールの不完全さととまどい、絵や写真のほか新たに習い始めた言語を組み合わせて創造的なコミュニケーションコードを日々開発するのに対し、集住地域では、通訳翻訳ツールの使用は保護者に任せているが、頻繁に使われる文書の翻訳版が20年間にすでに蓄積されている。また保護者の中には第2世代も増えているため、言語的支援を頼れる人材の確保が容易になっている。

(5) 「保育所保育指針」には「子どもの国籍や文化の違いを認め、互いに尊重する心を育てるようにすること」とあるが、言語の違いには言及していない。「言葉の獲得」も保育の範囲にあるが、非主流言語家庭の子どもの支援が明示されていない。欧州や北米の先行研究でも、子どもの潜在的な二言語能力(家庭言語維持)が奨励されることは稀で、就学前教育従事者の中でそれを奨励する人の多くが、自身も多言語使用者であると言っている。本研究の調査参加者のだれも自分が多言語使用者とは言っていないが、活動の中に特定の子供たちの家庭の言語を取り入れる事例はあった。地域人口の10%が話す言語を地域文化とみなし、すべての子どもがその言語で歌うことがある他、園では家庭言語を共有する子供たちがすぐに親しくなり、日本語を教え合うようすがよく観察されている。また集住地域には、移民第2世代と共に育ち二言語使用の多様な形を知っている保育士もいる。外国人が少ない地域でも、相手によって言語を変えることができる子どもに出会ったことがある保育士は、二言語の発展を見守る。

(6) 一方、家庭の言語の使用を保育園で禁止するだけでなく、家庭の日本語使用を奨励する保育士もいた。子どもが二言語間で混乱することを恐れている。「2歳までの子供たちには日本語でたくさん話しかけ、2歳からは話すように促す必要があります。そうしないと学校で困難を感じることになるから。家庭では中国語を聞いて、保育園では全部日本語では、子供も混乱します」という信念は、保育士養成課程で学んだ理論とL1使用を否定する外国語教育の経験を組み合わせで作られた。日本に住む未就学の子どもを持つ外国人保護者にとって、家庭の言語文化の学習は子どもの教育の中でも最重要関心事であると伝える先行研究があるが、親との信頼関係を優先する保育士でも、保護者のこの関心事を考慮していない。

(6) 集住地域の保護者に対して行ったインタビューでは、過去に保育士から家庭で日本語を話すように指示されたことがあり、子どもが家庭の言語は受信能力のみの事例を聞いた。しかし、この事例においても、King & Fogle (2006)が述べるとおり、親の言語政策にはさまざまな要因が影響しており、保育士の助言の影響は限定的であると言える。

(7) 保育士養成課程に導入する知識項目として、とくに早期二言語使用に関する知識の必要性を強調したい。これは新規の養成だけでなく、現職者に向けた研修にも取り入れたい。経験の積み重ねによって保育士の信念に変化が起こるとしても、もしメゾレベル、つまり施設の責任者や地方自治体の政策のレベルで誤った通念が依然として支配的であれば、保育士は実践を変えることをためらうかもしれない。集住地域では、多言語多文化接触の機会が多く、ミクロとメゾのレベルで知識が共有されているため、保育所で二言語使用を受入れる一定の創造性が保証されている。今後、メゾレベルの調査を検討したい。マクロレベルでは、就学児童に関して家庭の言語による学習支援の有効性がすでに認められている一方、就学前に対してはその見解が広く共有されていない。二言語使用の知識を更新し、実践事例を共有するために、異なる分野の関係者や研究者間の協力を促進する価値はあるだろう。

参考文献

厚生労働省 (2018). 『保育所保育指針解説書』

Coste, D. & Cavalli, M. (2015). *Éducation, mobilité, altérité. Les fonctions de médiation de l'école*. Conseil de l'Europe.

King, K. A. & Fogle, L. (2006). Bilingual parenting as good parenting: parents' perspectives on family language policy for additive bilingualism. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 9(6), 695-712.

North & Picardo (2016) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. Developing Illustrative Descriptors of Aspects of Mediation for the CEFR*. Strasbourg: Council of Europe.

Zarate G. (coord.) (2003b). *Cultural mediation in language learning and teaching*. Strasbourg: Council of Europe.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 姫田麻利子、呉裁喜 | 4. 巻 40 |
| 2. 論文標題 多文化共生保育における保育士の意識と実践 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 語学教育研究論叢 | 6. 最初と最後の頁 87-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 HIMETA Mariko, SUZUKI Elli | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Medier ses appartenances plurielles. Reflexivie et travail auto-ethnographie guide | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Liddicoat, A., Derivry-Plard, M. & ReN (dir.) Mediation interculturelles en didactique des langues et des cultures | 6. 最初と最後の頁 108-125 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17184/eac.9782813003904 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 呉裁喜 | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 多文化共生保育実践における保育士の認識としての文化的コンピテンス | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 保育ソーシャルワーク学研究 | 6. 最初と最後の頁 29-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 姫田麻利子 | 4. 巻 39 |
| 2. 論文標題 複数の所属と新しいことば 言語教師の文化間仲介(Intercultural mediation) | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 語学教育研究論叢 | 6. 最初と最後の頁 85-95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 呉裁喜 | 4. 巻 60 |
| 2. 論文標題 ソーシャルワーク（対人援助）におけるカルチュラルコンピテンス概念に関する考察 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 大東文化大学紀要（人文科学） | 6. 最初と最後の頁 133-144 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 HIMETA Mariko, OH Jaehee | 4. 巻 22(2) |
| 2. 論文標題 Experiences plurilingues des personnels d'accueil en creche : communication avec les parents allophones nouvellement arrives et les enfants bilingues émergents | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Recherches en didactique des langues et des cultures. Les cahiers de l'Acedle | 6. 最初と最後の頁 1-13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/11qah | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 HIMETA, M., OH, J. |
| 2. 発表標題 Representations de langues chez les personnels de creches et choix de politique linguistique familiale des parents étrangers. Etude de cas au Japon. |
| 3. 学会等名 Colloque Acedle 2022（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Breugnot, J. Guiza, J. Himeta, M. Suzuki, E |
| 2. 発表標題 Researchers' positioning in intercultural mediation: Features of the field and methodological issues |
| 3. 学会等名 The 19th World Congress of Applied Linguistics, AILA 2021（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 HIMETA, M., MARSHALL, S. |
| 2. 発表標題 Brazilian and Peruvian Nikkei families: plurilingual repertoires, family language maintenance, and multiple identities in Japanese society |
| 3. 学会等名 the 20th AILA World Anniversary Congress [SYMP01] ReN: A plurilingual and pluricultural vision for languages education (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------------------|------------------------------|----|
| 研究分担者 | 呉 裁喜 (Oh Jaehee) (40326989) | 大東文化大学・文学部・教授 (32636) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|------------------------------|--|--|--|
| フランス | Uniersite Bordeaux Montaigne | | | |
| カナダ | Simon Fraser University | | | |